

年間第 14 主日 マタイ 11：25～30

朗読された「幼子」の箇所は、お隣の「小さき花」幼稚園の名前の由来なので、まずそのお話をします。「小さき」とは幼きイエスの聖テレーズ（テレジア）が自分のことを言ったことからきています。

聖テレーズはフランスに生まれました(1873~1897)。5歳の時「一番したいことは、神様を喜ばせること」で「神様を悲しませることは絶対しません」と約束しました。「神さまに一生を捧げよう」と15歳でカルメル会に入りました。けれども、体が弱く、冬の寒い時でも暖房はなし、洋服は決められた服1枚だけなど、厳しい生活で、病気になってしまいました。ある時、聖書を読んで気付きました。「自分の弱さのうちに神さまが働かれるから、自分の弱さを誇る、自分は“小さくていい”のだ、自分では何もできなくてもいいのだ」と、これこそが神さまと仲良くなる道だ、“小さき道”だと喜びました。(イザヤ書 66、12-13)

小さな子が「階段を上ろう!」と、必死に足を持ち上げていると、お父さんお母さんが抱っこしてくれて上に引き上げてくれます。天のお父さまも、同じように“呼び求めている”そばに来てくれて、幼子を抱き上げ、頂上へと運んで下さいます。テレーズの道は「自分で頑張っているから自分は偉い」という道ではありません。神さまがテレーズの中で働いて、神さまのわざが現れる道です。テレーズは弱く無力な幼子であること以外には何も望みませんでした。自分の力では出来なくても「神さま、すべてをなさるのはあなたです。」こう思って、神さまと一番のお友達でい続けました。イエスさまは幼子が大好きでした。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これらは御心に適うことでした。」(今日の福音箇所)

また、人と比べたりしない大切さもテレーズは説きます。野に咲く花を見てごらん。立派な大きなバラやきれいな真っ白の百合だけが野原をきれいにしているわけではありません。「私はここに咲いています」と、しっかりときれいに咲いている小さな花々があるからこそ、野原は美しくなります。太陽は「あなたは小さい花だから光をあげません」なんて言いません。一つ一つの花に太陽は光を照らします。神さまも同じです。どの子も大切なのです。テレーズは立派なバラになろうとは思いませんでした。小さい花であることを喜びました。神さまが望まれる小さい花になろうと一生懸命に生きました。24歳の若さで結核で亡くなりましたが、テレーズの自叙伝は今でもたくさんの人を励まし、神さまの優しさを伝えています。「テレーズのように小さき花・自分の花を咲かせて欲しい。」と願って“小さき花”の名前が幼稚園に付けられました。

続いて有名な後半部分 28 節～30 節について少しお話しします。この箇所は、学生時代に初めてイグナチオ教会を訪れたときに掲示板に書かれていた言葉ですが、今、どう感じているかをお話しします。サラリーマンの時は、ノルマ・ノルマが重荷(軛)でした。契約をどう取るか? クレームを出さないためにどうするか? 喜んでもらうためにはどうするか? そのために時間・エネルギーの大半を使っていました。幼稚園の仕事にも、気を配る点がいくつもあり楽とは言えません。1つ解決してもまた次の問題が出てきます。頑張っても教会の中では脚光は浴びません。園長をする司祭はいなくなっています。「努力は海の藻屑と消えてしまう」と感じることもあります。でも、子どもたちは可能性に満ちているし、困難があっても成長が感じられます。業績を残したり、本を書いたり・・・形には残りませんが折に触れて「安らぎ」は得られています。「かつての自分のよ

うにノルマを背負うサラリーマンを助けたい」と思って司祭を志しましたが、負いやすい別の軛を神様は用意されました。

「幼子のような小さき者」になれるように、神様は負いやすい軛を用意してくださっている、願いと信頼を持って1週間を過ごしましょう。